

「無常」について

先にご紹介した駒澤大学名誉教授、奈良康明先生の講話「今を着実に歩む」の中でも触れられていましたが、仏教用語に「無常」という言葉があります。

例えば「諸行無常」というように、「無常」という言葉からは「人の世のはかなさ」を思い浮かべることが多いのではないのでしょうか。しかし、この言葉から前向きな考え方を見出すこともできるのです。今回はこの「無常」という言葉の意味について、薬師寺執事「大谷徹柴（てつじょう）氏」による解説をご紹介します。

○人生には終わりがある

私たちは親しい人の死に直面した時に「ああ、人生は無常だな」と感じることもあると思います。私も、あこがれの師匠であった高田好胤（こういん）管長や、尊敬する父を亡くした時に、しみじみとそう思いました。大好きな人に二度と会えないことは辛く、悲しいものです。その思いを断ち切るためには、「人の一生は無常で、はかないものだ」と考えて、自分を納得させるしかありませんでした。

私たちはそんな時、「人生には終わりがあるのだ」ということに改めて気づかされますね。誰でも、生まれたからには必ずいつかは死なねばならないのですが、身近な人の死に接するまで、そのことを真剣に考えようとはしません。しかし、愛する人を亡くし、無常を感じることで、「自分が今生きていることを強く意識する」のではないのでしょうか。

「無常だから、はかない」と嘆いてばかりいてはだめなんですね。また、「無常なんだから、何をやっても仕方ない」とあきらめてもいけません。この言葉から、自分なりに何を見出すことができるのかが肝心だと思います。

○無常は人生へのエール

「無常」という言葉は「常で無い」と書きます。ですから私は、無常を「いつでもあると思うな」と読み替えることができるのではないかと考えました。つまり、無常は「人生はいつまでも続くわけではなく、締め切りがある」ということを、私たちに教えてくれているのではないのでしょうか。

「締め切り」があると意識するのとしないのでは、大きな違いが生じます。たとえば、やらなければならない仕事があるのに、「明日があるさ」と思って手をつけずにいるうちに、数日が経ってしまったという経験はありませんか。あるいは、急に別の仕事できて、「こんなことなら、昨日のうちにやっておけばよかった」と後悔することもあるでしょう。しかし、締め切りを意識すると、やるべきことを先延ばしにははいられない。自分が今、本当にやらなければならないことが、見えてくると思います。

あるいは「締め切り」を、ゴールラインと置き換えることもできるでしょう。人間には「死」というゴールがあるのだから、そこに到達するまでは、一生懸命に頑張らなければ

ならない。無常な人生だからこそ、「今」をおろそかにできないのです。

そう考えると「無常」という言葉は、「人間は変化するものだし、最後は消えてなくなる存在なのだから、生きている今こそ、精一杯頑張りなさい！」というエールのようにも思えてきます。この言葉は私に、「“今” が与えられている自分を、大切にしなければならない」と教えてくれるのです。

今という大切な時間を生きていることを確認するために、私は毎日、自分の手を見ます。そして、「この肉体は、いつか必ずなくなってしまうんだぞ。だから、自分の意志で生きられる今の自分に手を抜くな！」と言い聞かせています。私にとってはまさに、「無常」が自分への激励です。

また、私はこう考えました。誰かの訃報を耳にした時、「惜しい人を亡くした。人生は無常だ」と悲しむのは仕方ないけれど、自分に対しては「無常だ」と言うてはいけない。自分の人生が終わる時、「やり残したことがあるのに、もう時間切れだ。なんて無常なんだ」とは思いたくないですね。

たとえば私は、これまで教わってきたことを、次の世代に伝えていかねばなりません。それをやり残したまま、人生の終わりを迎えることのないように、「今、努力し、研鑽しなくてはならない」と考えています。

皆さまにも、「無常」という言葉の中から、前向きな教えをたくさん見出していただき、充実した毎日を過ごすために役立てていただければと思います。

自分に対して、「無常だ」という言い訳は、決して使ってはいけない。

(てつじょう)

10.05.05 守山裕次郎